

資料

Mスターコンテナを用いたタラノキ育苗試験*1

岩元高治*2

はじめに

ウコギ科の落葉低木であるタラノキ (*Aralia elata*) は、伐開地などにいち早く侵入して定着し、頂芽は早春に芽吹き独特の香味が喜ばれる「タラノメ」として古くから食用に供されてきた。近年再生林の推進が課題とされる中、地拵え棚に発生するタラノキに着目した研究（大矢ら 2021）が行われるなど関心が高まっている。しかし、野生種には鋭いトゲがあることから、トゲのない改良品種が栽培用には好まれている。

タラノキの増殖は一般的に根ざし法により行われ、生産者自ら掘り取った根茎を約 15~20cm に剪定鋏で切断し苗畑に植え付けて、翌春に掘り取り定植する（鹿児島県林業改良普及協会 2016）が、トゲなしの優良な品種の苗は、ポリポット苗として販売されている。当センターでは、近年スギや広葉樹のコンテナ苗生産技術開発試験に取り組んでいることから、筆者はタラノキのコンテナ苗を作成し根系発達状況を調べたので、その結果を報告する。

内にあるタラノキ（トゲなし）の根茎 10 本および 1 年生株 4 本（写真 1）を掘り取り、2023 年 3 月 28 日に M スターコンテナ（長さ 15cm）に挿しつけた（以下、根茎苗、1 年生株苗）。また、ふかし栽培の要領で芽出し・発根した穂木 14 本を同様に挿しつけた（以下、ふかし栽培苗）（表 1）。コンテナ容器の培地は、ココヤシ殻にパーミキュライトを体積比 9:1 で混合し緩効性被覆肥料（ジェイカムアグリ社製ハイコントロール 085-180）を 7g/L 加えたものを用いた。コンテナ苗は当センター内の自動散水機のあるガラスハウス内に置き、約 8 か月後の 11 月 22 日および 12 月 1 日に苗の根鉢の状態や根系の発達状態等を調査した。根量および根鉢形状について、基準を表 2 のとおり作成し、目視で表面の根量を 5 段階、根鉢形状を 6 段階で評価した（祁答院 未発表一部改変）。また、表面上の評価と実際の根量を比較するため、12 本の根鉢を崩して根と芽を取りだして、根量評価区分ごとに根の重量と本数、地表面上に露出した芽の長さとお本数を測定した。

材料と方法

始良市蒲生町上久徳の鹿児島県森林技術総合センター



写真 1 タラノキの根茎や 1 年生株 (○囲み)

結果と考察

根茎苗、1 年生株苗およびふかし栽培苗の生存状況を表 3 に示す。根茎苗および 1 年生株苗は、1 か月後には葉が

表 1 各区分ごとの供試材

区 分	内 容
根茎苗	鉛筆程度からやや太い根を長さ 15cm に調整したもの
1 年生株苗	最下部の芽を残して茎を切断し根を 10cm 程度つけたもの
ふかし栽培苗	3 月 1 日にふかし栽培の要領で長さ 30cm の穂木をバケツの中に水浸し、発芽と発根が見られたもの

表 2 根系評価基準

区 分	I	II	III	IV	V	VI
根 量	ほぼ無し、 加えのみ	少ない	やや少ない	やや多い	多い	—
根鉢形状	未形成	片側 未形成	上側 未形成	下側 未形成	上側一部 未形成	十分

*1 Iwamoto, T. : Study on raising Taranoki (*Aralia elata*) using M-StAR container.

*2 鹿児島県森林技術総合センター

*2 Kagoshima Pref. Forestry Technology Center, Aira 899-5302 Japan.

表3 挿しつけ8か月後のコンテナ苗生存状況

区分	供試本数(本)	生存本数(本)	生存率(%)
根茎苗	10.0	10.0	100.0
1年生株苗	4.0	4.0	100.0
ふかし栽培苗	14.0	0.0	0.0

表4 根鉢評価結果 (単位:本)

区分	I	II	III	IV	V	VI
根茎苗 根量		2	1	3	4	
根鉢形状		5			4	1
1年生株苗 根量		2	1		1	
根鉢形状	1	2				1



写真2 コンテナ苗の根鉢状況（左から1・2枚目：区分II（片側未形成）、3枚目：V（上部一部未形成）、4枚目：VI（十分））

展開し、11月には落葉し、生存率はいずれも100%と高かった。ふかし栽培苗は全て挿しつけ時には発根していたものの活着しなかった。根が挿しつけ時より伸びないまま腐敗しており、細く短かった根が培地との接触で痛んだと推察される。

根鉢の発達状況の評価結果を表4および写真2に示す。根鉢は種根から生じた直径5mm程度の1次根が、Mスターコンテナのスリットに沿って伸長し、細根が根系を発達させていた。根茎苗の方が1年生株苗より約8か月間における発達状況は優れていた。両者ともに、1次根が露出し根量は多く見られても根鉢が一部未形成であるものが多く、根鉢全体が崩れないものは1本ずつしかなかった。

根量評価区分ごとに根の重量と本数を測定したものを表5に示す。種根から1次根が多く発生するほど細根も発達して総重量は多くなった。また、コンテナ苗の培地を取り除いた根系の状況を写真3に示す。種根から芽が出てその部分に根系が形成されているが、培地の底部についた一部の小根が空気根切りされずに上方に折り返しサークリング現象のような状態が見られた。

根量評価区分ごとに芽の長さや本数を測定したものを表6に示す。全ての区分において地上部に10cmを超えるような芽は現れず、根量との関連も判断できなかった。畑で育てた苗木は翌春に1mほどに成長したものを掘り取ることとしており（鹿児島県林業改良普及協会2016）、今回

表5 根量評価区分ごとの根重量及び小根数

区分	根量I	根量II	根量III	根量IV	根量V
根茎苗 根平均重量(g)		6.06	3.23	10.46	16.59
1次根(5mm上)平均数(本)		1.5	4.0	5.0	6.0
1年生株苗 根平均重量(g)		3.02	3.34		33.36
1次根(5mm上)平均数(本)		2.0	2.0		5.0

表6 根量評価区分ごとの芽（地上部）の長さ及び本数

区分	根量I	根量II	根量III	根量IV	根量V
根茎苗 芽平均長さ(cm)		2.3	2.4	2.4	3.4
芽平均数(本)		1.0	3.0	2.3	1.8
1年生株苗 芽平均長さ(cm)		3.0	4.0		8.0
芽平均数(本)		1.0	1.0		1.0



写真3 コンテナ苗の根系の状況（左：種根付、右：バラシ）

の試験ではこの規格に達していないことから翌春の出荷は困難である。施肥量をスギコンテナ苗と同量にしたため少なかったことが影響したのではないかと推察する。また、コンテナ苗の特色である空気根切りも一部機能していない結果になった。種根が長すぎたためか、タラノキ自体の性質なのか今回の試験では判断できないが、設定した根茎長15cm等に施肥量7g/Lの条件はコンテナ苗生産には適していないと判断した。今後は、種根長および施肥量の変更のほか、藤島(1981)は畑においても直立ざしは発根量がやや少ないとしていることから、コンテナを傾けて斜めざし状態にするなどの試験方法を検討し、タラノキのコンテナ苗生産が可能か判断していく必要があると考える。

引用文献

藤島勇(1981)2各作型共通の苗づくり, タラノメー露地栽培・ふかし栽培ー: pp.34-46, 農山漁村文化協会, 東京.

鹿児島県林業改良普及協会(2016)タラノメ, 林業普及マニュアル特用林産, pp.114-126.

大矢信次郎・田中裕二郎・柳澤賢一・加藤健一(2021), 機械地拵えを行った再造林地におけるタラノキの発生量と利用可能性, 日本森林学会大会発表データベース, 132巻